

# 宗教的ランドマークの成立過程

—— 大観音像を例として ——

津 川 康 雄

## The Formation of Religious Landmark

—— In Case of the Great Goddess of Mercy ——

Yasuo TSUGAWA

Religions often provide a source of support in a variety of ways for people, not only spiritually but also mentally. People worship various Gods and Buddha to fulfill their need for faith. Each religion has designated symbols, the cross and Christ figure for Christianity, and the temple and Buddha figure for Buddhism.

This paper focuses on the Great Goddess of Mercy as an example of a reflectly religious figure, analyzing how it became a landmark and explaining general and special rules attached to it.

In conclusion during the Showa era, figures of the Great Goddess of Mercy were erected throughout Japan for the following purposes.

- Spread faith in the Goddess of Mercy.
- A memorial for the war dead and sufferers of war.
- Sights and the view points.
- Local promotion.

Many were erected where people can easily perceive emphasizing maternal love from the feminine figures. The basic foundation of a religious landmark is that it naturally accept by many people, and one of the most typical is the compassionate Great Goddess of Mercy.

- . はじめに
- . ランドマークの宗教性
- . 観音信仰と観音像
  - a . 観音信仰
  - b . ランドマークとしての大観音像
  - c . 大観音像造立の経緯

- ・大観音像に対する住民の意識
- a．高崎白衣大観音に対するイメージ
- b．大観音像に対する認知度
- c．大観音像の訪問歴
- ・おわりに

## ・ は じ め に

上毛かるた<sup>1)</sup>に「<sup>びやくい</sup>白衣観音慈悲の<sup>みて</sup>御手」の札があることは、群馬県民には広く知られている。また、高崎市の文化的シンボルとしても「高崎白衣大観音」は、少林山達磨寺の「福だるま」と共に、人々の心の中に深く刻み込まれている。

言うまでもなく、宗教は人間にとって様々な形で精神的支えとなっていることが多く、人々は神仏を崇めることにより、その目的を達成しようとする。したがって、信仰対象となる神仏は有形であることが多く、人々に視覚的に訴えかけることが重要な要件となる。また、信仰の場や対象になるものは多種多様で、キリスト教では偶像崇拜の有無は存在するものの、教会や十字架及びキリスト像が、仏教においては寺院や塔、仏像が中心的役割を果たし、神道においても御神体となる山や岩、<sup>つるぎ</sup>剣や<sup>やしほ</sup>玉、社などがその役割を担っている。その中において、人々に畏怖畏敬の念を抱かせ、ひときわ目立つように造られる信仰対象や場が数多く認められる。たとえば、パリのノートルダム寺院やウィーンのセントシュテファン寺院は特徴的な聖堂や尖塔によってその威容を誇り、リオデジャネイロのコルコバードの丘上に、ブラジル独立100周年を記念して造られた巨大なキリスト像が衆目を集める。わが国における宗教的ランドマークも多種多様なものが確認でき、日本の景観を特徴づける重要な要素となっているものが多い。たとえば、東大寺の大仏や各地に造られている三重の塔や五重の塔、山の上などに造られることが多い仏舎利塔なども、衆目を集める対象として位置づけられる。本稿で取り上げる観音像も、小さなものから大きなものまで幅広く存在し、様々な意味で人々に精神的な影響を及ぼしてきたものと言えよう。

このような衆目性に支えられた信仰対象や場は、地域における景観構成要素の一つにもなり、アイ・ポイントやアイ・ストップとなるシンボルとして、逆に塔（タワー）から見下ろすことが可能なビュー・ポイントとして、観光スポットになることも多い。言い換えれば、地表面におけるランドマークとしての機能を果たしていることにもなる。ランドマークは人間の視覚対象として様々な機能を担っている。それは、象徴性・記号性・場所性を発揮すると同時に、人間の感情・感性に作用し、快適性・潤い・安堵感・郷愁感・威圧感といった効果を促すのである<sup>2)</sup>。宗教的ランドマークは、信者にとっては自らの信仰心が満たされる場となり、それ以外の人々にとっても何らかのシンボリック対象として認識されることになろう。

本稿においては、宗教性がランドマークに反映される例として、日本各地に分布する大観音像

を取り上げ、その基盤をなす観音信仰との関連を概観し、ランドマークとして認識される大規模な観音像がいかに造立されていったのか、その過程を明らかにしたい。そして、それらがいかにランドマーク化されていったのかについて分析し、宗教性がランドマークに反映される場合の一般性や特殊性といった要因を考察することにより、宗教的ランドマークの諸要件を探ることを研究の目的とした。また、住民が大観音像をいかに認識しているのかについて行なったアンケート調査を用い、その分析を通じての検討も加えてみたい。

## ．ランドマークの宗教性

日本においては、宗教性がランドマークを通じて認識される例は極めて多い。先にも述べたように、太古より八百万の神や仏が信仰・認識される日本において、新旧の別なく、あるいは教派・宗派の別にかかわらず、神社・仏閣及びそれらに関連する建造物などが、人々の視覚を支える一要素となっている。とくに古代社会においては、仏教文化の伝来が国家の鎮護と結びつき、その後の基盤が形成されたのである。もちろん古くから神道の伝統は生きており、農耕社会における自然との共存など、神と人々の生活ないしは祭りを通じて密接に関連してきた。その他の宗教も様々な経緯と歴史の中で生まれ、意識・無意識の差はあるにせよ、我々の生活に直接・間節に影響を及ぼしている。場合によっては建築物などが高い芸術性を保持していることから、文化財として認定されることもあり、地域における重要な観光対象として位置づけられることも多い。

ランドマークの中に宗教性が見出される際には、いくつかのパターンが存在する。たとえば、神社・仏閣の建つ広がりや極めて明確に他の地域と分離されている場合である。そこには、様々な様式に基づく建築物が認められ、仏閣・社殿・鳥居・塔・像・梵鐘などにより特徴づけられる。このような広がりや、人々の日々の生活空間とは異なる、一種の別空間として認識されることによって、多様な精神作用が促されることも多い。

また、システム化されたランドマークとして認識することもできる。たとえば、仏教の各宗派においては、本末制度に支えられた寺院の地域的・階層的結合関係が認められる。さらに、弘法大師の遺徳を偲び、功德を得ようとする「四国八十八カ所」の霊場や、各地に展開する「観音霊場」、江戸時代に隆盛を極める「お伊勢まいり」や「成田詣」など、信仰と物見遊山を兼ね備えた場所がその例となる<sup>3)</sup>。これらも信仰対象のみならず、現在では観光対象として把握することも可能である。いずれにしても、宗教的ランドマークは個人的・社会的認識度の差は生じるにせよ、一種独特の雰囲気をもたらし、人々の感情・感性に働きかける機能を有するものと言えよう。

このように、宗教的ランドマークは数多く認められるが、現代のように思想信条の自由を前提に、信仰の自由が保障される社会にあっては、特定の宗教が突出してランドマークを生み出すことは社会的認知の得にくいものとなろう。まして、政教分離の原則から、政治的に宗教的ランドマークを創出することはできない。このような制約の中で生み出される宗教的ランドマークは、

自ずから限定されてくるのである。すなわち、人々の共感が得られる存在となるには、人間の視覚に強く作用する色や形が求められ、美的で荘嚴・安らぎ・潤い等を前提とした畏怖畏敬の念がもたらされなければならない。ある意味では、教派・宗派を越えた普遍性が必要となろう。

## ・ 観音信仰と観音像

### a . 観音信仰

観音信仰の歴史的経緯を説明した速水によると<sup>4)</sup>、「古く奈良時代の社会で、観音がもっとも古く信奉されていたことは疑いない。観音は地蔵・不動に先んじてまず登場し、『観音経』などに説く、幅広く具体的な現世利益によって、日本人の信仰を最初に集めた菩薩であったといえる」と説明する。また、観音信仰の本質を説いた鎌田によると<sup>5)</sup>、「観音菩薩は、大慈悲によって人々を救うことを誓願とした大乘の菩薩であり、この観音菩薩ほど広く仏教圏の人々に愛され、信仰され続け、多くの尊像を造り続けられた菩薩は他に例をみない」と述べている。すなわち、観音信仰は仏のこころを示す慈悲が観音菩薩に転化し、あらゆる衆生の悲しみ、苦悩そして願いを包み込んでくれることを基本として、観音は仏の姿になったり、あるいは菩薩の姿になったり、三十三身に変化することにより、この世に現れるとされる<sup>6)</sup>。こうして観音信仰は人々の現世利益を求める心に合致し、「南無観世音菩薩」と唱えることで、あらゆる苦難を取り除いてくれるという無限の慈悲を基本とし、信仰対象として観音菩薩像が位置づけられるようになった。

観音信仰の場としては、京都の清水寺を始め、三十三間堂、東京浅草の浅草寺など日本各地に数多く点在している。とくに、清水寺や浅草寺はその門前に典型的な門前町を形成しており、毎年、多数の善男善女の参詣者を集めている。また、鎌倉時代から室町時代にかけて、観音信仰が大衆化したことにより、「西国巡礼」になった観音霊場巡礼が全国にもできるようになり、「板東観音霊場」、「秩父観音霊場」などが成立した<sup>7)</sup>。こうした寺院や霊場には観音菩薩が祀られているわけだが、そのほとんどが堂内に本尊として安置されていることが一般的である。

また、日本の地名にも「観音」がつけられるものが多く、香川県の「観音寺市」をはじめ、神奈川県三浦半島の「観音崎」、京都府船井郡の「観音峠」など地域認識の一要素として位置づけられてきたことが理解される。

### b . ランドマークとしての大観音像

観音信仰の基本となる観音像は、あらゆる功德を施すという点から、これまでに様々な種類の観音像が造られてきた。たとえば、聖観音・千手観音・十一面観音・馬頭観音・白衣観音等々である。それぞれに意味があり、願いの込められた姿ということになる。そのほとんどが観音堂などに納められ、人々の信仰心を喚起するものとなり、規模的にも小さなものが多い。長い年月を経てきた観音信仰と観音像は、仏閣及び巡礼の霊場や信仰対象として根強くランドマーク化されてきたのである。

宗教的ランドマークの成立過程

ところが、昭和になるとそれまでには見られなかった観音像の造立が行われるようになる。それは鉄筋コンクリート製（一部に金属製のものがある）の大規模観音像であり、高さ数十メートルから百メートルを超える大観音像が屋外に造られていくのである。建造技術の進歩とも関連するのであろうが、より衆目を集めることの可能な大観音像が出現していった（第1表）。

まず、1929（昭和4）年に大船大観音造立が観音思想の普及を前提に着手されている。しかし、これは5年後に輪郭が完成したものの、第2次世界大戦の影響で一時中断され、1960年に完成を

第1表 大観音像の所在地一覧

名称	所在地	造立年次	高さ (材質・色)	立地点	造立主体	造立目的
北海道大観音 (立像)	北海道 (芦別市)	平成元年	88m (鉄筋コンクリート・白)	平地 (レジャーランド内)	個人 ↓ 株式会社	・観光・展望・胎内巡り ・総合レジャーランド (北の京芦別)
釜石大観音 (立像)	岩手県 (釜石市)	昭和45年	48.5m (鉄筋コンクリート・白)	岬の先端	寺院	・海の守護・慰霊(津波犠牲者) ・世界平和の祈願 ・展望(釜石湾)
仙臺天道白衣大観音 (立像)	宮城県 (仙台市)	平成3年	100m (鉄筋コンクリート・白)	丘陵上	個人 ↓ 株式会社	・平和祈願・展望 ・市制100周年記念(高さ100m) ・観光(ニューワールド仙台)
会津慈母大観音像 (立像)	福島県 (河東市)	昭和62年	57m (鉄筋コンクリート・白)	丘陵上 (庭園内)	個人 ↓ 株式会社	・世界平和・観光・展望 ・庭園(会津村)
高崎白衣大観音 (立像)	群馬県 (高崎市)	昭和11年	41.5m (鉄筋コンクリート・白)	丘陵上 (観音山)	個人 ↓ 寺院	・戦没者の慰霊供養 ・観光(展望) ・国民思想の善導
くぼ 救世大観音像 (立像)(三尊像)	埼玉県 (名栗村)	昭和46年	33m (鉄筋コンクリート・白)	山頂 (白雲山)	個人 (寺院・鳥居観音)	・観音信仰 ・胎内巡り ・展望
東京湾観音 (立像)	千葉県 (富津市)	昭和36年	56m (鉄筋コンクリート・灰白)	山上 (頂) (大坪山)	個人 ↓ 宗教法人	・全世界の戦死戦災者の慰霊 ・夜間：灯台の役割 ・展望(東京湾)
大船大観音 (半身像)	神奈川県 (鎌倉市)	昭和36年 (昭和4年に計画)	33m (鉄筋コンクリート・白)	丘陵上	有志	・観音思想の普及
慈母観世音菩薩大立像 (大観音立像)(立像)	石川県 (加賀市)	昭和63年	73m (鉄筋コンクリート・金)	丘陵上 (観音山)	個人	・平和の祈願 ・レジャー施設・展望 (ユートピア加賀の郷)
世界平和聖観世音菩薩像 (立像)	長野県 (山ノ内町) 湯田中温泉	昭和41年	25m (青銅製ブロンズ仕上げ)	丘陵上	有志	・世界平和の祈願
りょうぜん 霊山観音 (座像)	京都府 (京都市)	昭和30年	26.4m (鉄筋コンクリート・白)	丘陵上	個人 →超宗派の教会	・第2次大戦戦没者の慰霊
世界平和大観音像 (立像)	兵庫県 (東浦町) 淡路島	昭和57年	100m (鉄筋コンクリート・灰白)	海辺 (丘上)	個人	・世界平和 ・観光(博物館等) ・展望(大阪湾)
小豆島大観音 (立像)	香川県 (土庄町)	平成7年	約100m (鉄筋コンクリート・白)	山上	寺院及び有志 (遍路会員)	・精神救済・人間育成 ・地域振興(島興し)・展望 ・小豆島八十八ヶ所(霊場)
救世慈母大観音 (立像)	福岡県 (久留米市)	昭和57年	62m (鉄筋コンクリート・白)	平地 (境内)	寺院 (成田山・明王寺)	・親子の幸せ(水子供養) ・展望

・高さ25m以上の大観音像を取り上げた。これに近いものとして「船岡平和観音像(宮城県・柴田町...24m)」、「平和大観音像(山梨県・韮崎峠...24m)」、「大観音立像(奈良県・高取町...20m)」などがあげられる。

・なお、ここでは岸壁(肌)に削られた大観音像を除いている。その例としては「百尺観音(福島県・相馬市...約39m)」、「大谷平和観音(栃木県・宇都宮市...約27m)」、「百尺観音(千葉県・鋸南町...日本寺)」などがあげられる。

・資料...各種パンフレット、ガイドブック及び聞き取り・現地調査による。

みた。足かけ30余年に及ぶもので、高さ33mの半身像である。現在でもその姿はJR東海道線の車窓から眺めることができ、鎌倉市を代表するシンボリックなランドマークとして位置づけることができる。その後、数多くの立像が造立されていくが、その先駆けとして群馬県高崎市に1934（昭和9）年、高崎白衣大観音が着工され2年後に完成した。これは地元の篤志家である井上保三郎により計画・立像されたものである<sup>8)</sup>。高崎市西郊の丘陵地に造立された白衣大観音は、その慈悲に満ちた姿が高崎を代表するランドマークとして広く知られ、その後の大観音像造立に少なからず影響を及ぼすことになる<sup>9)</sup>。以後、<sup>りょうぜん</sup>霊山観音（京都市）、東京湾観音（千葉県富津市）、世界平和聖観世音菩薩像（長野県山ノ内町）、釜石大観音（岩手県釜石市）、救世大観音像（埼玉県名栗村）、世界平和大観音像（兵庫県東浦町：淡路島）、救世慈母大観音像（福岡県久留米市）、会津慈母大観音像（福島県河東町）、慈母観世音菩薩大立像（石川県加賀市）、北海道大観音（北海道芦別市）、仙臺天道白衣大観音（宮城県仙台市）、小豆島大観音（香川県土庄町）等が次々に造られていった。これらコンクリート造りの大観音像とは別に、大岩石像（とくに岸壁を掘削して造形するタイプ）も認められ、大谷平和観音（栃木県宇都宮市）、百尺観音（福島県相馬市）、百尺観音（千葉県鋸南町：日本寺）などに代表される。いずれも20mを越える高さを持ち、東大寺の大仏の総高約18m、鎌倉の大仏総高13mと比較してもその高さが際だっている。

造立の目的は多様であり、①観音信仰の普及、②平和祈願、③戦没者や災害犠牲者の慰霊供養や水子供養、④国民思想の善導、⑤観光・展望、⑥地域振興（地域興し）等々である。歴史的に見ると、当初のものはかなり純粋に観音思想の普及や世界平和の祈願といった理念を掲げるものが多いが、近年では観光・レジャーブームに対応するような観光資源の対象として造立されるものが増加している。その結果、大規模なレジャーランドなどにおけるシンボルとして造立されるものが多い。

大規模観音像が造られている場所は、そのほとんどが見晴らしの良い山や丘陵の頂点付近であり、人々に認知されやすい位置が選択されている。もちろん、大観音像の眼差しや視線は市街地や海に注がれ、造立者の御利益に対する意図が強く反映されている。また、大観音像のほとんどが二十三の観音像を胎内に安置し、胎内巡りを行うことで御利益が得られ、居ながらにして観音巡礼が可能な設定をとっている。いかにも今日的な発想で、広範囲に展開し、長時間必要とする観音巡礼を大観音の胎内を巡ることで、手短に済ませることができるようになっている。また、像の上部に展望台・展望所が設けられていることも多い。したがって、大観音像は人々の信仰心を満たす存在であるとともに、視認性を高めるランドマークとなり、高所から周辺地域を展望する役割も果たしている。さらに釜石大観音や東京湾観音、世界平和大観音像（淡路島）、小豆島大観音など、海辺に位置するものは海上からのシンボリックなランドマークとなり、あたかも灯台の役割を担っているかのようである<sup>10)</sup>。

大観音像の造立に用いられた素材は、世界平和聖観世音菩薩像（長野県山ノ内町）の金属製を除いてコンクリート製である。もちろん、大観音像造立にあたっては高度で特殊な建造技術が求

められるため、それらの進歩に支えられていたことは言うまでもない。近年では大手ゼネコンのもとで、高度なコンピュータ・デザインによる建造技術も幅広く取り入れられている<sup>11)</sup>。大観音像の表面の色彩は慈母観世音菩薩大立像（石川県加賀市）の金色や、金属製の世界平和聖観世音菩薩像を除くと、圧倒的に白色に塗られているものが多く、コンクリートの地肌を生かしたため、灰白色を示すものも若干認められる。やはり、観音像に求められる清純・清廉・潔白・純粹無垢といったイメージが表現されているものといえよう。また、大観音像のモデルとなる観音像の制作に当たっては、著名な芸術家の力を借りることも多く、大観音像が一種の芸術性を帯びた存在としてとらえられることも少なくない。なお、観音には男女の別がないとされるが、大観音像にほぼ共通しているのは、女性的で柔和・華麗な姿を表現しているものが多い。言い換えれば、白衣観音像や慈母観音像のように、人々の苦難を優しく取り去ってくれるイメージをもとに母性愛が強調されている。

造立主体はそのほとんどが寺院や個人の篤志家・資産家によるもので、公の機関に寄付されたり、株式会社・宗教学法人などに組織化されるなどして維持されている。少なくとも幅広く遍く慈悲を施す観音といえども、宗教的色彩が強いものであり、地方自治体などの行政機関が造立に関与することは少ない。ただ、小豆島大観音のように地域振興（島興し）といった目標を持つものに対して、地元の議員などがバックアップした例は僅かながら認められる。なお、小豆島大観音造立には小豆島八十八カ所を巡るお遍路さん達の浄財も含まれており、観音像が人々の求心力を発揮する対象であることも見逃せない<sup>12)</sup>。

このように、大観音像は、慈悲あふれるその姿があらゆる人々の苦難を取り除いてくれる信仰対象として受け入れられることを前提に、美的に優れ、場合によっては高所からの展望台としての機能を果たし、シンボリックなランドマークとして位置づけられるのである。それは、アメリカ合衆国において、移民の人達の心の支えとなった自由の女神像にある種通じるイメージをもつものと理解される。また、信仰対象として大きな像が造立されるには人々に安心感をもって受け入れられるものでなければならない。たとえば、救世慈母大観音像のある福岡県久留米市成田山明王寺は、第2次世界大戦後、千葉県の成田山新勝寺から分霊して建立された寺院であり、本尊は不動尊である。しかし、不動尊の憤怒の形相を大立像にすることは、地域や人々に馴染むとは考えにくく、代わって大観音像が造立された次第である。宗教的ランドマークが形成される基本は、万人に幅広く違和感なく受け入れられるものでなければならない所以である。

### c．大観音像造立の経緯

ここで、大観音像造立の経緯をまとめてみると、おおよそ3期に分けることができる。大観音像造立が始まるのは、昭和に入ってからであり、第1期は第2次世界大戦前及び昭和30年代のものである。すなわち、観音思想に基づく造立意図や第2次世界大戦の犠牲者の慰霊という側面を強く保有している。その意味では観音像を、祈りの対象として位置づけているものといえよう。しかし、高崎白衣大観音もそうであったように、人々が様々な意図をもって集中・集積する場と

なることから、大観音像に付加価値を加え、胎内からの展望を可能にしたことが、その後、大観音像を塔（タワー）として機能させることに結びついたのである。

第2期は昭和30年代後半から高度経済成長期の末にかけてであり、引き続き、観音のもつ靈験による御利益や慰霊、そして、広く世界平和を願いとして造立されるものが多い。大観音の慈悲を、普遍的なものとして位置づけようといった意図が読み取れる。

第3期は高度経済成長が終わり、レジャーブームが進む中、大規模レジャー施設等に造立され、シンボル性が強調された姿として、また展望台としての機能が強く意識されるものとなっている。像の高さも100mに達するものが次々に造られた。すなわち、見る・見られる存在として位置づけられたのである。また、一部の寺院では多額な費用を必要とする寺院及び像の維持管理のため、参詣者はもとより観光客などを集めるために、付加価値の高い大観音像を造立している例も認められる。さらに、地域興しのシンボルとして位置づけられるものもある。

これまで述べてきたように、観音像は宗教的には衆生に広く受け入れられる菩薩であり、その形態も人々に違和感なく認知される対象である。その結果、造立の意図は様々であるが、日本各地に大観音像が数多く造立されていったのである<sup>13)</sup>。

## ・大観音像に対する住民の意識

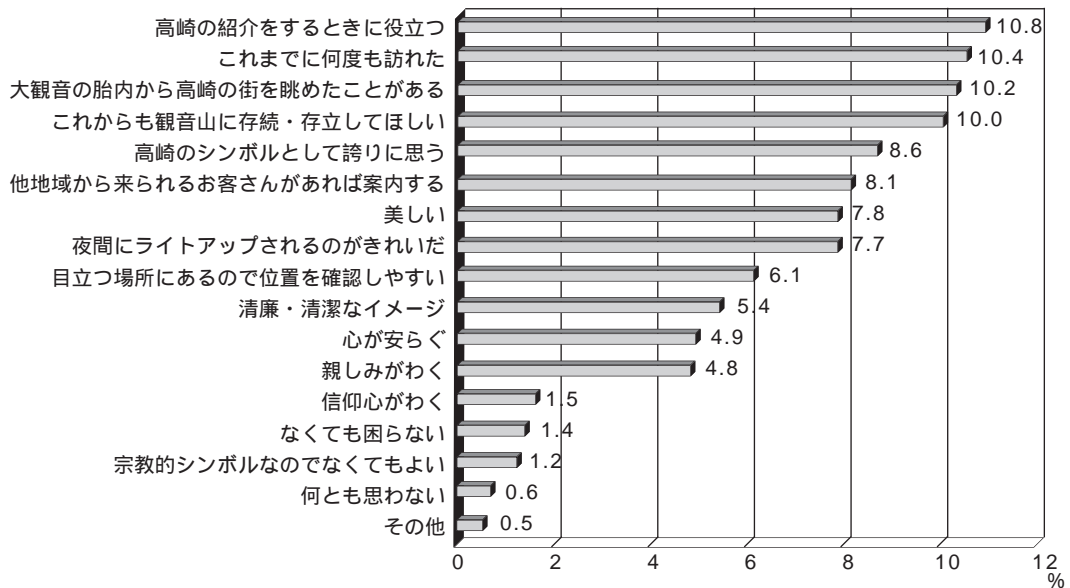
ここでは、高崎市民に対して行ったアンケート調査<sup>14)</sup>を基に、大観音像に対する人々の意識を分析してみたい。

### a . 高崎白衣大観音に対するイメージ

まず、全体の傾向をみると（第1図）、全体の10%を超える項目として挙げられるのは、「高崎を紹介するときに役立つ」、「これまでに何度も訪れた」、「大観音の胎内から高崎の街を眺めたことがある」、「これからも観音山に存続・存立してほしい」などであり、高崎市民にとって大観音像が身近で、個々人にとって高崎のイメージ形成に欠かすことのできない存在としてとらえていることが理解される。それは、自らの経験・体験に裏付けられもので、大観音像及び観音山をシンボリックに位置づけ、自分自身のアイデンティティ形成に組み込む様子が窺える。また、中間的なグループとして挙がっている項目は、「美しい」、「夜間にライトアップされるのがきれいだ」、「清廉・清潔なイメージ」など、視覚イメージとしてとらえることができる指標である。いずれも上位を占めるものではないが、大観音像に対して何らかの美的感覚を享受していることは否めない。回答率の低い項目は、「何とも思わない」、「宗教的シンボルなのでなくてもよい」、「なくても困らない」など、大観音像に対して否定的な意見である。高崎市民の意識に深く浸透した大観音像のイメージが、比較的良好なものであることが裏付けられているものと言えよう。こうしたなかで、興味深いのは、「信仰心がわく（1.5%）」、「心が安らぐ（4.9%）」といった項目の低さである。本来、観音像は宗教的背景を強くもつものである。少なくとも、高崎市民は大観音像を宗



宗教的ランドマークの成立過程

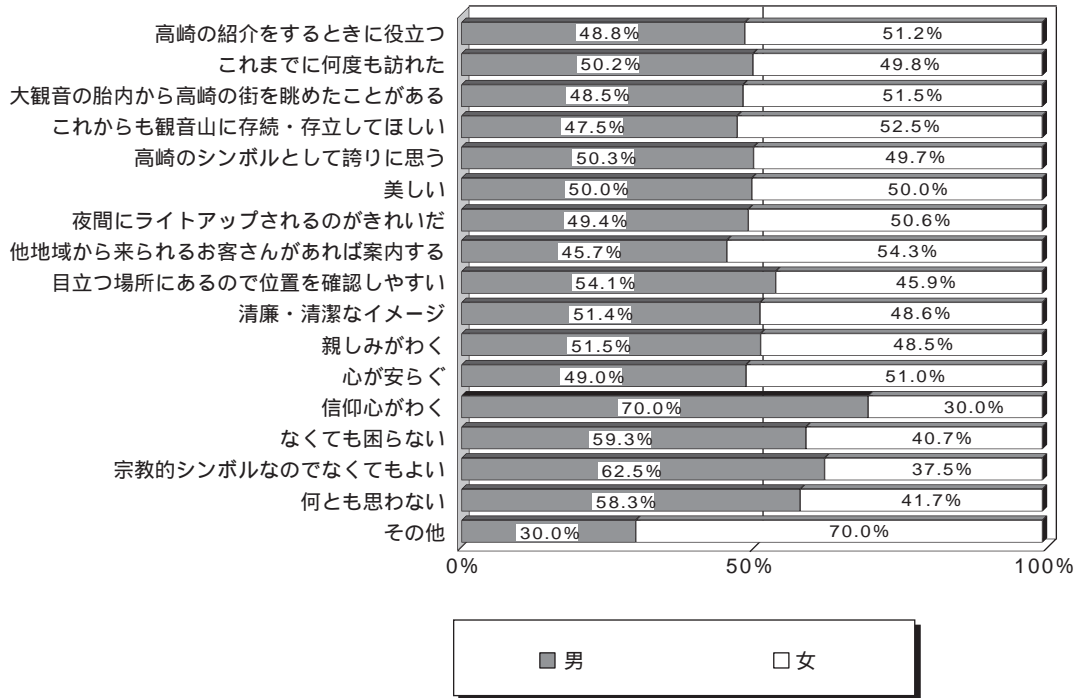


第1図 高崎白衣大観音像に対するイメージ（全体）

教的信仰対象と捉えるよりは、シンボリックなランドマークとして位置づけているように思われる。

男女別にみると（第2図）、両性間のイメージの差は小さなものが多く、多項目で数パーセントの隔たりを示すものがほとんどである。とくに、上位を占める項目に顕著で、「美しい（男50：女50）」、「これまでに何度も訪れた（男50.2：女49.8）」、「高崎のシンボルとして誇りに思う（男50.3：女49.7）」など、男女の別なく大観音像をシンボリックな対象として捉えている状況が理解できる。男女比が大きく異なる項目は、「信仰心がわく（男70：女30）」であり、大観音像が女性的イメージと重なることに対する男女の意識差が現れているとも考えられる。しかしながら、次に大きな差を生じる項目が、「宗教的シンボルなのでなくてもよい（男62.5：女37.5）」であり、大観音像を信仰対象として認識する姿と、宗教性の希薄さを求めるといった男性の錯綜する側面が現れている。

年代別のイメージに違いがあるのかを把握するために、標準偏差を平均値で除した変動係数を用いて分析を行った（第2表）。変動係数はその値が大きければデータ間の差が大きく、小さければデータ間の差が小さいものと判断される値である。これによると、10代から70以上の7グループ（世代）の値が小さい項目は、「大観音の胎内から高崎の街を眺めたことがある（0.12）」、「これまでに何度も訪れた（0.12）」が上位を占めている。いずれも回答者の経験・体験に基づく項目であり、高崎市民にとっては世代間の差なく、大観音像との結びつきが日常化しているものと言えよう。これに対して、「その他（1.02）」を除くと、もっともその値が大きいのは、「信仰心がわく（1.11）」、「なくても困らない（0.73）」、「何とも思わない（0.60）」などである。いずれも、項



第2図 高崎白衣大観音像に対するイメージ (男女別)

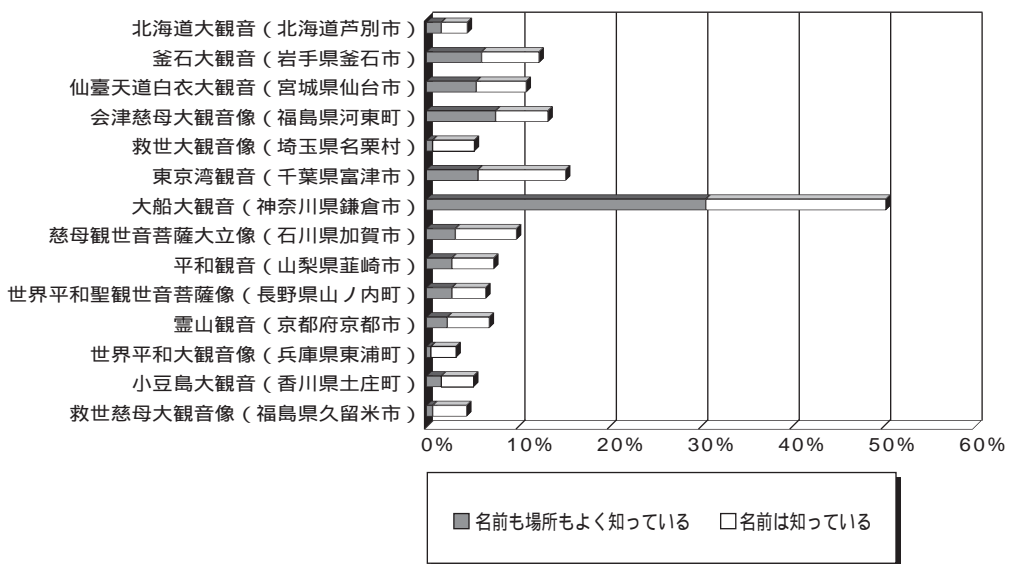
第2表 高崎白衣大観音像に対するイメージ (年代別・複数回答)(%)

項目	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70以上	平均値	標準偏差	変動係数
大観音の胎内から高崎の街を眺めたことがある	12.1	11.0	12.2	10.7	11.3	9.4	8.5	10.7	1.3	0.12
これまでに何度も訪れた	9.4	11.5	12.2	10.3	12.4	9.6	9.0	10.6	1.3	0.12
清廉・清潔なイメージ	4.0	4.9	6.1	5.2	4.7	6.2	5.5	5.2	0.7	0.14
これからも観音山に存続・存立してほしい	11.4	11.7	7.3	10.1	10.4	9.5	8.8	9.9	1.4	0.14
高崎の紹介をするときに役立つ	12.8	12.6	14.6	11.4	11.3	9.6	9.3	11.7	1.7	0.15
夜間にライトアップされるのがきれい	10.1	9.7	9.8	7.5	7.3	6.8	7.2	8.3	1.3	0.16
美しい	9.4	5.6	6.1	7.9	8.0	8.5	8.1	7.7	1.2	0.16
他地域から来られるお客さんがあれば案内する	4.7	6.7	9.8	7.9	8.9	8.7	8.1	7.8	1.5	0.20
高崎のシンボルとして誇りに思う	6.0	6.3	6.1	9.4	9.8	9.0	8.8	7.9	1.6	0.20
目立つ場所にあつので位置を確認しやすい	9.4	5.6	6.1	5.2	5.1	6.1	7.4	6.4	1.4	0.22
親しみがわく	3.4	4.0	7.3	4.3	3.8	5.4	6.2	4.9	1.3	0.27
心が安らぐ	2.0	3.1	1.2	5.4	4.4	5.7	6.3	4.0	1.8	0.45
宗教的なシンボルなのでなくてもよい	0.7	1.3	0.0	0.6	0.9	1.3	1.9	1.0	0.6	0.59
何とも思わない	0.7	1.3	1.2	0.9	0.0	0.6	0.4	0.7	0.4	0.60
なくても困らない	3.4	2.7	0.0	1.5	1.1	1.0	0.7	1.5	1.1	0.73
信仰心がわく	0.0	0.2	0.0	1.1	0.7	2.1	3.5	1.1	1.2	1.11
その他	0.7	1.6	0.0	0.6	0.0	0.2	0.4	0.5	0.5	1.02
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0		
平均値	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9		
標準偏差	4.3	3.9	4.7	3.8	4.2	3.4	3.1	3.9		

目自体の比率が低いものであり、単純なグループ比較を行うべきではないが、例えば、「信仰心がわく」と答えた10代は0.0%、20代0.2%、30代0.0%ときわめて低い。これに対して、60代2.1%、70以上が3.5%となり、若い世代は大観音像を信仰対象として見ておらず、年齢層があがるにつれて一部の人達に、信仰心が芽生えていく様子が窺える。その差は、「心が安らぐ(0.45)」、「親しみがわく(0.27)」などの項目にも現れており、10代~30代の値が低く、60代・70以上の値が高い。このように、同一のランドマークも世代の違いによって捉え方が大きく異なることが明らかとなった。

b. 大観音像に対する認知度

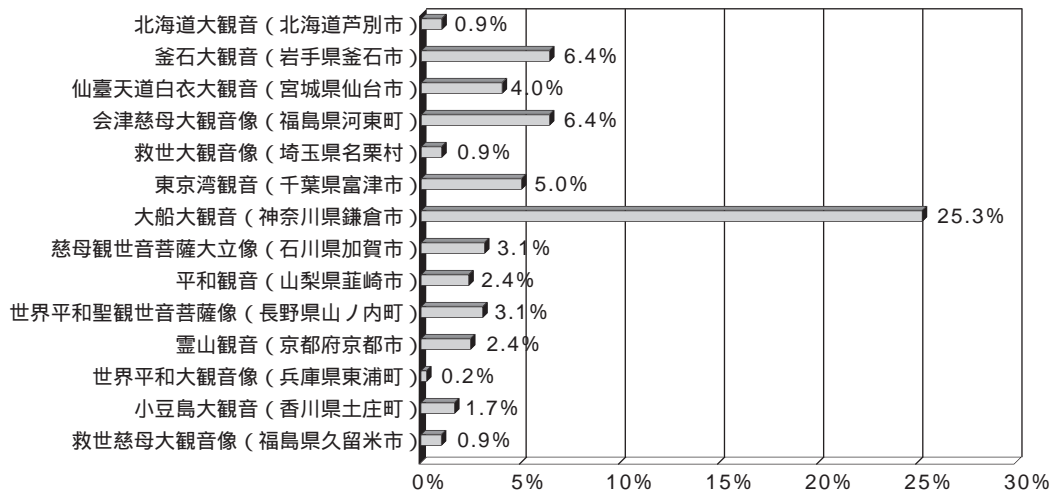
次に日本各地に分布する14の大観音像について、回答者がいかにそれらを認知しているのかについて質問してみた(第3図)<sup>15)</sup>。これによると、認知度が高いと判断できる「名前も場所もよく知っている」、「名前は知っている」の両項目を合せて、1割を越える値を示すのは「大船大観音(50.1%)」、「東京湾観音(15.2%)」、「会津慈母大観音像(13.5%)」、「釜石大観音(12.5%)」、「仙臺天道白衣大観音(10.9%)」に過ぎない。大船大観音を除くと、他の大観音像に対する認知度はきわめて低いと言わざるを得ない。淡路島の「世界平和大観音像」に至っては、両者を合せて全体の3%の人が認知しているに過ぎない。また、比率は低いながらも、相対的に東日本の大観音像に対する認知度が高く、西日本の大観音像に対する認知度が低く、高崎市からの距離と比例して認知度が低下していく様子も窺える。すなわち、大観音像は高崎白衣大観音や大船大観音といった全国的に知られたものを除くと、常日頃、人々が強く心に留めるランドマークではなく、きわめて限られた地域における認識対象であると言い換えることができよう。



第3図 大観音像に対する認知度(全体)

## c. 大観音像の訪問歴

大観音像に対する認知度とともに、訪問歴を尋ねてみた(第4図)<sup>16)</sup>。これは、ほぼ先の大観音像に対する認知度と相関する結果が得られた。すなわち、大船大観音を除くと回答者が実際に訪れたことのある大観音像は少なく、最も高い「大船大観音」で25.3%、第2位が「釜石大観音(6.4%)」、「会津慈母大観音像(6.4%)」と続いている。上位に位置づけられる大観音像は、いずれも観光対象としての性格を併せ持ったものが多く、回答者にとっては自らの経験・体験の中で認知された大観音像と言えよう。それは、高崎から遠く離れた「北海道大観音(0.9%)」、「世界平和大観音像(0.2%)」、「福岡県久留米市の「救世慈母大観音像(0.9%)」の値の低きにも現れている。このように、大観音像に対する認知度と訪問歴は相互に深く関わっており、高崎市からの距離、観光対象としての認知度の強弱といった違いが強く反映されているものと言えよう。もちろん、大観音像に関する情報量の多寡との関連もあろう。



第4図 大観音像の訪問歴(行ったことがある)(全体)

## . お わ り に

以上のように、少なくとも宗教的なランドマークは、様々な人々に違和感なく受け入れられる対象であり、それらがランドマーク化されていることが明らかとなった。その理由は、人それぞれに信ずるものの差があるように、無宗教・無信仰を貫く人など、多様な価値観が存在するためである。したがって、現代社会においては、公の機関などが特定の宗教観に基づく建造物・造立物を生み出すことは考えられない。高崎白衣大観音のように造立者からの寄贈を受け、公的機関がその管理にあたった例もわずかながら存在したが、現在では文化剂的価値が見出されるもの

を認定し、第三者機関に管理を委ね、補助金などを交付することが限度である。もちろん、現代ほど価値観の多様化した時代においては、公的機関が特定の宗教をバックアップすることは、民主主義の原則からも容認されるものではなからう。

このように、現在日本において造立された大規模な宗教的ランドマークは、宗教色が年月の経過とともに薄められ、地域における景観の一要素として、普遍化・同化してしまったと考えることができる。もちろんそこには、人々に違和感なく受容されることが前提とならう。その代表例が大観音像ということになる。大観音造立にあたっては、反対運動が起こることも少なく、その容姿から視覚的にも不快なイメージが生じにくい。観音信仰の懐の深さ故、すべすが許されてしまうといった点も根底にある。観音像は長い歴史の中で築きあげられてきた観音信仰と、その慈悲深い姿が人々に対し、宗教色をさほど意識することなく、広く受け入れられてきたのである。また、深い傷を負った第2次世界大戦の慰霊の意味をもつものが多いことが、モニュメントとしての意味を付加している。そして多くの篤志家の存在が、造立資金を支えていたのである。私見になるが、大仏（る舎那仏）を例外として、多数の人々の信仰対象となっている「地藏尊」、「不動尊」がその姿・形が大規模に造立されるとは考えにくい。とくに「不動尊」などは、その“憤怒”の形相が、“恐怖心”などにつながり、人々が日々認知する対象としてふさわしくないものとなる。

このように、宗教色彩の強い大規模なランドマークが成立する基本は、信仰対象としての普遍性ととも、あらゆる人々に違和感なく受け入れられる存在であり、人々に安らぎや安堵感をもたらすことが前提となる。こうした諸条件に合致するのが観音像であったことは疑い得ない。宗教的ランドマークは、歴史的背景や地理的慣性に支えられて、その形が維持されていくことが多い。とくに、神仏が実際の形として表現される像は強くその形が保持されていく。普遍的性格を有する信仰対象が、その形を失うことに対する恐怖感といった感情が喚起されるのかもしれない。ランドマークは、少なくとも人々に様々な心理的効果をもたらすものである。昭和になってからという比較的新しい歴史をもつ大観音像であるが、いずれ文化財的価値が見出される可能性が高い。今後、このような観点から、後世の人々に広く受け入れられるようなランドマークが生み出されていくことが期待される。

(つがわ やすお・本学地域政策学部講師)

註

- 1) 「上毛かるた」は郷土群馬県をよく知り、郷土愛を育むことを目的に1947年に作られた。そこには群馬県を代表する史跡・名勝・人物・産業文化が88枚の取り札・読み札に取り上げられている（発行所：財団法人群馬文化協会）。なお、白衣を「びやくえ」と呼ぶことも多い。
- 2) 津川康雄『地表空間におけるランドマークとその意義』、立命館地理学9、1997、17～29頁。
- 3) 一般に宗教都市として認識されるものも多い。それらは神社・仏閣が少なからず都市形成・構造に大きな影響を及ぼしているものである。日光（二荒山神社、東照宮）成田（新勝寺）長野

(善光寺) 身延(久遠寺) 天理、琴平(金比羅宮)などに代表され、門前町・鳥居前町として位置づけられる。

- 4) 速水 侑『観音・地藏・不動』、講談社現代新書1326、1996、24頁。
- 5) 鎌田茂雄『観音のきた道』、講談社現代新書1341、1997、132頁。
- 6) 前掲注5) 16頁
- 7) 前掲注5) 200頁。なお、観音霊場は西国三十三、板東三十三、秩父三十四の合わせて百観音霊場となるように札所が設けられている。
- 8) 茂木 晃監修『ぐんまの日本一88』、上毛新聞社、1997、172～173頁。
- 9) この観音像を造立したのは井上工業(本社高崎市)の創立者である井上保三郎である。井上は高崎の産業発展に貢献した実業家であり、郷土愛ゆえ高崎のシンボルとなるものを造りたいと願った。周知のように高崎は鉄道交通の要衝であり、列車の車窓から衆目を集めることのできるものと考えたようである(上毛新聞社出版局 坂口二郎編・著(高崎市役所企画調整部企画管理室 発行)『実録 たかさき』、1981、197～201頁)。その過程では『五重の塔』や『三重の塔』なども候補にあがったようだが、最終的に『観音像』となった。

造立の目的は『戦役者の慰霊供養』、『国民思想の善導』、『観光高崎の建設』などであったとされる(横田忠一郎『高崎白衣大観音のしおり - 大観音建立秘話 - 』、あさを社、1984年、1～69頁)。原型は伊勢崎出身の彫刻家森村西三(日展無鑑査)が造形し、当時の土木建造技術の粋を集めて鉄筋コンクリート9階建、外壁の曲面は変形ブロックが用いられ、表面は白セメントで塗り固められた(石原征明・飯野信義『図説・高崎の歴史』、あかぎ出版、1988年、184～185頁)。昭和11年10月20日、井上の誕生日を期して開眼式が挙行された。ちなみに、この観音が造立された地は古くから清水(きよみず)観音があり、観音山という地名の由来ともなったようである(田島武夫『高崎の名所と伝説』、高崎ライオンズクラブ、1973年、1～3頁)。したがって、井上の頭の中には、当地と観音像造立を結びつけようとする意図が少なからずあったものと推測される。この観音像は当初から胎内巡り及び展望が念頭に置かれており、その後の大観音像のプロトタイプとなっていたことは否定できない(ヒアリング調査を行うと、それぞれの大観音像の関係者は、自らのオリジナリティを主張するため、明確に高崎白衣大観音の伝播性を認めることはできなかった)。第2次世界大戦中には、空襲の目標になり、取り壊されるのではないかといった噂が流布するように、高崎の代表的ランドマークとして位置づけられることになった。その後、大観音像は高崎市へ寄贈され、昭和16年に和歌山の高野山にあった慈眼院の移転に伴い、同寺へ寄贈され現在に至っている。鉄筋コンクリート造りは木造建造物に比べて寿命が短いとされるため、造立から60年(1996)に綿密な修復工事が行われた。

造立当初は必ずしも良い評価ばかりではなかったと言われるが、現在では多くの人々の心に刻まれたシンボルである。このように社会的に認知されたランドマークは、それがたとえ宗教的色彩の強いものであったとしても、継続・維持されていくのである。そこにはランドマークのもつ歴史的背景及び地理的慣性が強く作用しているのである(津川康雄『ランドマークの形成と地理的慣性 - 城郭を中心として - 』、高崎経済大学論集39-3、1996、21～42頁)。

- 10) 東京湾観音は造立の趣旨に、灯台としての役割がうたわれている。
- 11) このゼネコンは、「小豆島大観音」、「会津慈母大観音像」、「救世慈母大観音像」の造立を手がけており、大観音建造の技術を蓄積している。したがって、各大観音のオリジナリティとは別に、形の上で類似性が現れることも否定できない。
- 12) 清水祐孝編「特集 小豆島大観音」、鎌倉新書(『宗教と現代17-4』)、1996、6～11頁。
- 13) 津川康雄『宗教的ランドマークとその要件 - 大観音像を例として - 』、立命館地理学10、1998、49～59頁。
- 14) アンケートは1997年の10月～11月にかけて、『高崎市のシンボルとイメージに関するアンケート

## 宗教的ランドマークの成立過程

ト調査について（代表者 津川康雄：高崎経済大学附属産業研究所）の一環として、大観音像関連の調査項目を設定した。高崎市民1,000人をランダムに抽出し、郵送形式で423の回答（回収率42.3%）が得られた。

- 15) 回答項目は「名前もよく知っている」、「名前は知っている」、「知らない」、「不明」である。
- 16) 回答項目は「行ったことがある」、「行ったことがない」、「不明」である。

付記) この研究をまとめるにあたり、1997年度高崎経済大学特別研究奨励金『空間認識に果たすランドマークの役割とその意義に関する研究（研究代表者 津川康雄）』の一部を使用した。